震災支援のきずなで交流

名古屋のNPO 刈羽村訪れ視察・演奏

中越沖地震で被災した刈羽村で支援活動を行った名古屋市のNPO法人「レスキューストックヤード」が二十五・二十六日、同村を訪れ、視察、音楽演奏などで交流を深めた。

同NPOは震災当時、高齢者の見守りや地区支援活動を行い、その後も村内行事で交流を続けている。二十五日は当時のメンバーら十人が同村赤田北方を訪れ、地元の集落担い手グループ「えびの会」の案内で復旧状況を視察した。地元関係者は「当時のきずなを大切に交流を続け、今日の日になった」と話した。

集落開発センターで開かれた高齢者のサロンでは、名古屋市の胡弓(こきゅう)演奏家・石田音人さん(51)が笛、三味線を交え五種類の楽器を演奏。参加者は手拍子を打ったり、なじみの曲で歌を口ずさんだりした。

石田さんは阪神・淡路大震災から慰問を始めた。二〇〇〇年の東海豪雨では自宅が床上浸水。中越沖の被災地を「全力で駆け抜けた二年間だったのだろう」と気遣い、名古屋の堤防決壊場所から増やし続けたスイセンの球根を贈り、「皆さんの所で咲かせて下さい」と呼び掛けた。地元の水品キヨ子さん(86)は「知っている歌もあり、楽しませてもらった」と喜んだ。

NPO法人常務理事の浦野愛さん(33)は「これまでの苦労と痛みを力に変えていこうという皆さんの思いを感じた。刈羽に教わったつながりの大切さを名古屋に伝えたい」と話していた。

胡弓の演奏に手拍子を送る住民とNPOメンバー＝刈羽村赤田北方の集落開発センター

柏崎日報

2009年（平成21年）7月28日（火曜日）（日刊・夕刊）